

古代ひとがたの人形を読み解く
都城発掘調査部平城地区考古第一研究室
研究員 浦 蓉子

第
126
回

都市ヨークにおける
初期中世装飾石彫の製作

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室
研究員 岩永 玲

オンライン
公開講演会

視聴無料
申込不要

令和3年

6月25日(金) 12:00 より公開

6月28日(月) 12:00 公開終了*

YouTube「なぶんけんチャンネル」にて公開いたします
(<https://www.youtube.com/channel/UCYmEE8czVlkvkX8DrV9Nulw>)

講演会資料は「奈良文化財研究所ホームページ」よりダウンロード出来ます

本公演会は平城宮跡資料館にて、毎年2回開催しております「公開講演会」を新型コロナウイルス感染症対策のため、オンラインで開催するものです。申込不要で期間限定公開致しますのでぜひご視聴下さい。



奈良文化財研究所 第126回公開講演会

目 次

- 講演 「古代の^{ひとがた}人形を読み解く」 1
都城発掘調査部平城地区考古第一研究室 研究員 浦 蓉子
- 講演 「都市ヨークにおける初期中世装飾石彫の製作」 9
都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室 研究員 岩永 玲

古代の 人形を 読み解く

都城発掘調査部 考古第一研究室 浦 尋子

はじめに

本発表では、考古資料としての人形の「使い方（機能）」に関する情報の追究を目的として、古代の人形を読み解いていきたい。

考古資料の機能を認定する方法には、①現代の感覚や経験にもとづいて機能を認定する方法、②民俗（Folklore）資料、民族（Ethnology）資料や文献史料から、機能を類推する方法、③遺物自体の細部の観察や分析にもとづいて、機能を認定する方法、④出土状況の観察にもとづいて、機能を認定する方法、⑤製作実験、使用実験から、機能を類推する方法がある（上原2009）。

以上の方法を念頭に置きながら、これまでの研究の積み重ねによって解き明かされてきた人形の「使い方」と、遺物自体の細部の観察や分析にもとづいて使い方を復元した事例を紹介する。

1. 人形とは何か

人形とは、「人間の形になる形代で人形代の略。縄文時代の土偶や弥生時代の木偶も人形の一種だが、通常は奈良・平安時代の人形をさす。（中略）ほとんどが扁平な正面の全身像であり、板を切抜いたものが多く、わずかに金・銅・鉄製品や銅製鍍金・鍍銀品がある。」（金子裕之2002「人形」『日本考古学事典』三省堂 pp.746-747より）。

1-1. 人形の形態

人形には様々な形態があるが（2～3頁の写真参照）、出土するものの多くは木製で「正面全身人形」と呼ばれる、薄い板材を切り出して顔・腕・脚などの表現を施したものである。奈良文化財研究所による平城宮・京の調査では現在までにおよそ500点以上の木製人形が出土しており、人形は大きく3つの形状に分類することができる（町田編1985）。Aは頭部・肩部・両腕・両脚の表現があるもの、Bは手の表現が欠くもの（腰部に三角形の切り欠きを入れ、胴と脚を区別するものもある）、CはA・B以外のものである。さらに2つの属性によって細分することが可能である。以下に細分の基準を示す。

①頭と肩のライン…Ⅰ. 頬が膨らむ・撫で肩タイプ、Ⅱ. 頬が痩せる・怒り肩タイプ

②脚の表現…a. V字形の切り込み、b. コ字形の切り込み

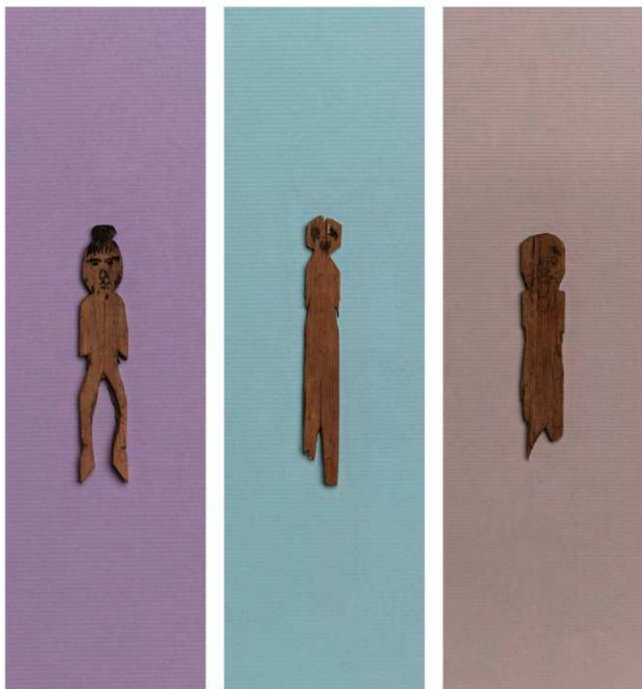
一般的に人形は、頭部・肩部・両腕・両脚の表現があるものから手の表現を省略するものへ変化する。そして、7・8世紀では全長15～18cm程度のものが主であるが、8世紀末から9世紀に大型化する（町田編1985）。平城京で出土している大型人形の一例として、平城京左京九条三坊十坪東堀川 SD1300 から出土した約120cmのものが4点ある。これらは、夥しい量の墨書人面土器、土馬、小型のカマド、斎串、小型の人形とともに出土している。小型の人形、大型の人形の出土状況に差がみられないことなどから、小型も大型の人形も同様に用いられたと考えられている（金子編1983）。



1-2. 人形の顔

木製人形には、刻線や墨描きによる顔の表現を持つものも多く、顎鬚や冠などの被りものや頭髪の表現をもつものもある（4～5頁写真参照）。巽氏は墨書人面土器の顔が、疫病神、胡神、漢神を表しているという水野正好氏の説から、人形の顔についても「髭面ひげで目が鋭く怒った表情やアンバランスな表情が多いのは鬼神を表した」からであるとする。一方で、「鬼神の表情から人間的な表情へと変わっていく」という変化も指摘しており、神の依代から個人の身代へという人形の役割の変化が対応するとした（巽1996）。

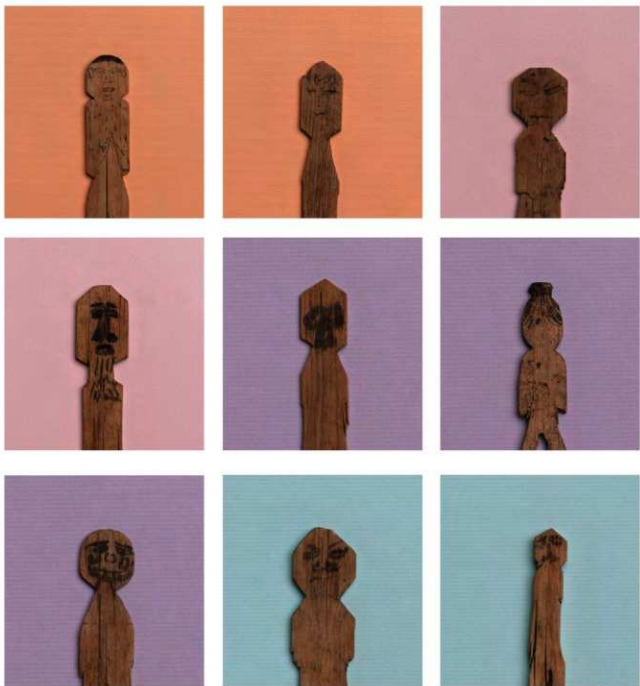
人形の顔には髭面や険しい表情のものがあるが、中には正倉院の大大論戯だだろんぎ画にみられるような役人を描いたようなものや、東三坊大路東側溝から出土した人形には僧形を思わせるようなものまであり、多様である。



2. 出土状況と文献資料からわかる人形の用途

1980年、平城第122次調査の発掘調査によって、200点あまりの大量の人形が壬生門前の二条大路北側溝SD1250から出土した(奈文研1981)。本資料の2～5頁に掲載した人形はすべて二条大路北側溝から出土したものである。この側溝は幅4.2m、深さ1m弱の東西方向の溝である。人形は、同じく木製の祭祀具である少数の鳥形や舟形、斎串とともに出土した。人形は全長9～16cmのものを中心に5.1cm～30.8cmのものがある。また、作りや表現の似た人形が2枚あるいは、3枚が折り重なって出土している。

これらは、6月と12月の晦日に行われる大祓の儀式に用いられた遺物であると比定されている。祓とは罪、穢れ、災いを祓う祭祀であり、中でも大祓とは「大臣以下百官男女悉く祓所に会」する、都の穢れを祓い清めるための儀式であった。朱雀門前で行われるが、平安時代に編纂された『法槽類林』には、「於大

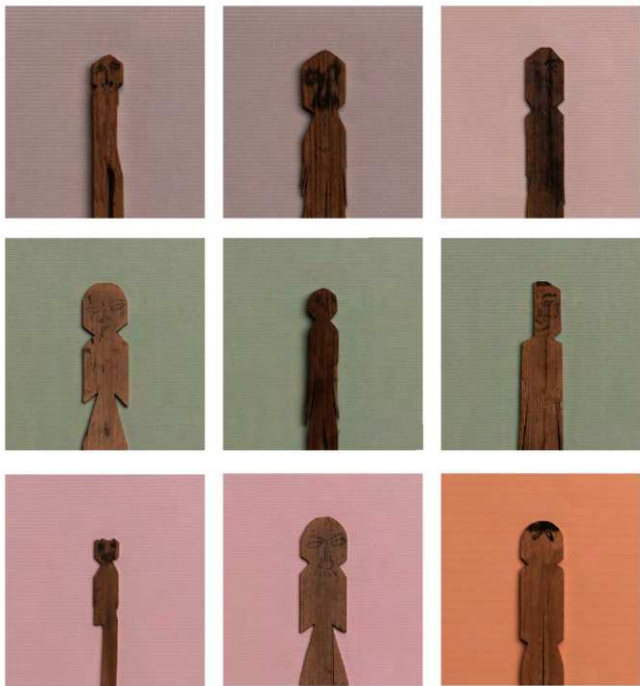


伴壬生二門間大路」とあり、大祓の儀式は大伴門（朱雀門）から壬生門前の大路で行われたようである。壬生門前での人形の出土状況は、8世紀における大祓の儀式の様子を伝えているとされる（金子1985）。

また、大祓や天皇・中宮・東宮の御蹟（みまが 跡）には、「鐵人像、金人像、銀人像」を用いるという記述が平安時代の編纂である『延喜式』にみられる。金属製の人形は主に宮内の基幹排水路や二条大路北側溝、東一坊大路西側溝など、宮に近接した場所での出土が多い。出土状況から、金属製の人形は『延喜式』の「鐵人像、金人像、銀人像」に比定されている。



平城宮南面東門（壬生門）と二条大路北側溝の位置関係



古代の人形鑑賞

2～5頁の人形はすべて壬生門前の二条大路北側溝から出土している。

1・18は同じ人形のウラ・オモテである。裏面(18)には頭巾の結びが表現されている。6は後ろ姿である。髪の毛の1本1本が描かれている。13と17は同じ板から作られた双子の人形。同じように見えるが13は眉が平たく、17は眉が上がり、険しい表情をする。このように同じ場所から出土した人形もその表現はさまざまである。

1	2	3	10	11	12
4	5	6	13	14	15
7	8	9	16	17	18



3. モノの観察からわかる人形の用途 その1

人形に残る文字情報や表面の痕跡から手掛かりにどのような用途に用いたのかを推測できる場合がある。

①呪詛の例

平城宮南面西門である若犬養門前で出土した人形は墨描きで顔の表現があり、胸に鉄釘が打ち込まれている(1)。また、平城宮の大膳職跡と推定される井戸から出土した人形は、墨書きで顔の表現があり、表裏面ともに人名と考えられる「坂部秋口〔近カ〕」が墨書されている。注目すべきは、この人形の両目と胸に木釘が打ち込まれている点である(3)。これらの例は、「唐賊盜律」厭魅条に「(中略)或は人身を刻作し、心を刺し目を釘うち、手を縛ぎ足を縛る」ことを禁じている一文があることから、人形を用いた呪詛の例と考えられている。また日本の『養老律令』の賊盜律にも同様の条文があることなどから、中国での人形使用の習俗の導入が想定されている(金子1985)。

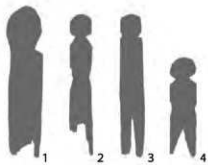


②呪詛の例

平城宮の壬生門前の二条大路北側溝 SD1250 で出土した人形には、表には顔の表現と胴部に文字が墨書きで書かれており、そのうち「女 依 死 廿」の文字が判読できる。裏面には「重病受死」と墨書されており、呪詛に用いたものと推定できる (2)。

③病氣治癒の祈願の例

平城宮の東方官衙地区を流れる東大溝 SD2700 から出土した人形には、墨描きで顔の表現があり、裏面には「右目病作 今日今」と記されていた。これは、眼病の治癒祈願のために、病気が起こったその日に流したものと考えられている (4)。



※6頁写真は表面、7頁写真は裏面

1. 板を割る



2. 人形に成形する



3. 顔を描く



4. 使用（廃棄）する



4. モノの観察からわかる人形の用途 その2

人形の木目と加工痕跡に着目した分析からは人形の使い方についての具体的な様相が明らかになった。上の写真の2枚の人形は壬生門前の二条大路北側溝の同じ場所から出土した。2枚の人形は同じ板から作られたことが確認されており（浦・星野2019）、板を割り、人形に成形し、顔を墨書きし、溝に流した（使用もしくは廃棄）という具体的な行為が復元できた。この2枚の人形は、製作から廃棄まで、2枚セットで取り扱われていたという「使い方」に関する情報を、モノ自体の観察と分析から導くことができた事例である。

おわりに

平城宮・京から出土した人形の使い方（機能）に関して、研究史を紐解きながら、考古資料の機能を認定する方法とともに概観した。特に大祓の儀式のように文献史学の成果と合致するような成果によって、平城宮・京における祭祀の在り方の理解が深まってきた。今後も遺物の細部観察や出土状況の観察とともに、さまざまな視点を複合的に組み合わせながら考古資料の機能を明らかにしていきたい。

上原真人 2009 「遺物の機能をさぐる」『考古学—その方法と現状—』財団法人放送大学教育振興会

浦谷子・星野安治 2019 「年輪年代学的手法を用いた古代木製祭祀具の研究」『考古学雑誌』第101巻第2号 pp.1-28

金子裕之編 1983 「平城京東堀川 左京九条三坊の発掘調査」奈良国立文化財研究所

金子裕之 1985 「平城京と祭場」『歴博研究報告』7 pp.219-290

金子裕之 2002 「人形」『日本考古学事典』三省堂 pp.746-747

筑津一郎 1996 『日本の美術 6 まじないの世界II』至文堂

奈良国立文化財研究所 1981 「南面東門（壬生門）の調査（第122次）」『昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』pp.3-10

町田章編 1985 『木器集成回録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所

都市ヨークにおける初期中世装飾石彫の製作

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室 岩永玲

はじめに

初期中世のブリテン諸島では、装飾を持つ自立式の石造物（初期中世装飾石彫、以下「石彫」と呼ぶ）が製作された。本報告では、都市ヨークで発見された石彫のうち、特に中心的な役割を果たす施文面に同じ獣像を持つ石彫群に焦点を当て、その変遷について意匠と製作技術の面から探る。

研究史における課題

- ・意匠中心の議論：技術面に対する理解が遅れる
⇒製作技術を復元し、意匠の議論に組み込む必要あり
- ・様式論に依拠した編年：分類基準が主観に左右されやすい
大局の把握に特化しており、個別資料の系譜を追いくい
共伴遺物の伝世を考慮しない年代推定
⇒型式学的検討に基づく詳細な相対編年を提示する必要あり

ヨークI類の製作と変遷

ヨークI類：耳・羽・紐状に延長する胴を持ち、口に紐を咥え、後方を振り返り、側面形で描かれる獣文を主像とする一群

- 意匠：獣文を構成する諸要素から型式学的変遷を追うことが可能
 - ・左右の対の描き分け：段階1→段階2→段階3の順に変化
 - ・獣の鼻先の装飾：槍先形→中間形→水滴形の順に変化⇒時間経過にともない、左右で対となる獣の描き分けや鼻先の装飾が本来持つ意味への認識は薄れていくが、全体としての獣の形態に著しい崩れは認められない
- 施文技術：変遷の段階に関わらず、一貫した技術で作られる
 - ・文様線どうしの交差部に対し、遠距離からの削り出しをおこなう
 - ・文様線の断面が角丸台形状を呈する
 - ・余計な工具痕を残さない⇒高い技術水準を持つ工房が存在

ヨークII類の製作と変遷

ヨークII類：細長い身躯に前肢・後肢を持ち、身躯から伸びる組紐状の紐と絡み合い、側面形で描かれる獣文を主像とする一群

●意匠

- ・2種類の獣の描き分け：製作期間を通して存続
- ・獣の細部表現と表現の巧拙：獣を構成する要素が揃っており表現が巧みであるものと、獣を構成する要素をところどころ欠き表現が拙いものがある

●施文技術

- ・文様線どうしの交差部を、基本的に緩勾配の削り出して表現
- ・面取りを施すものは断面が角丸台形状を呈する

●獣の表現と製作技術の関係：以下の3つの可能性が考えられるが、絞り込みは困難

- ・割付の水準のみが時間経過にもなって下がった可能性
- ・割付と彫刻技術の両方の水準が時間経過にもなって下がった可能性
- ・工房差、もしくは特定の工房内の製作者の技量差が表れている可能性

ヨークI類とヨークII類の相対編年

ヨークI類とヨークII類に共通する獣文：ヨークII類では獣が本来備えるべき要素への認識が薄く、ヨークII類に特有の獣文を持つ要素の混入を招く
⇒ヨークII類のほうが後出

課題

- ・変遷案の新古の順の検証
- ・ヨークで発見された獣文以外の文様を持つ資料の編年
- ・金属製品や写本等を含むより広範囲の編年への石彫編年の組み込み

主要参考文献

- Hope-Taylor, B. 1971. *Under York Minster: Archaeological Discoveries 1966-1971*. The Dean and Chapter of York, York.
- Lang, J.T. 1991. *Corpus of Anglo-Saxon Stone Sculpture Vol. III Eastern Yorkshire*. Oxford University Press, Oxford.
- Phillips, D. 1985. *Excavations at York Minster Vol. II The Cathedral of Archbishop Thomas of Bayeux*. Royal Commission on the Historical Monuments of England, London.
- Townend, M. 2014. *Viking Age Yorkshire*. Blackthorn Press, Pickering.

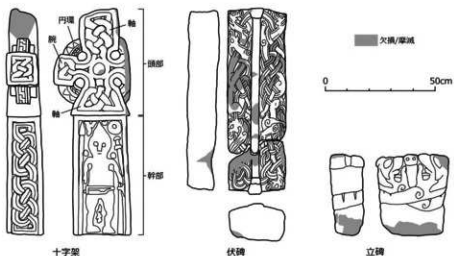


図1 初期中世装飾石彫の器種と部位名称



図2 ヨーク市内の初期中世装飾石彫発見地

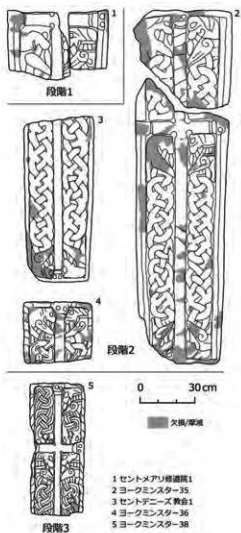


図3 ヨークI類の獣文の変遷

表1 ヨークI類の属性相関

資料名	彫の位置	左右の対の彫き分けに関する属性				彫先の裝飾	各部の施工技術	
		彫の強さ	彫の深さ	彫の裝飾	寸法		技術型式	該当部分
セントメアリ修道院1	左下文様区・上段	×	×	×	彫・磨輪	1	彫輪形	彫の輪郭部 彫の輪郭部 彫輪
	右下文様区・上段	○	○	○	太い磨輪		彫輪形 DTV形	
ヨークミンスター35	左上文様区	○	×	×	×	2	彫輪形	彫の輪郭部 彫の輪郭部 彫輪
	右上文様区	○	○	○	彫・磨輪		彫輪形	
	左下文様区・上段	?	?	?	?	彫輪形		
	右下文様区・上段	○	○	○	太い磨輪	彫輪形 DTV形		
	左下文様区・下段	?	○	?	?	彫輪形		
	右下文様区・下段	○	○	?	彫・磨輪	彫輪形		
セントデニース教会1	左下文様区・下段	○	○	?	?	2	彫輪形 DTV形	彫の輪郭部 彫の輪郭部 彫輪
	右下文様区・下段	×	?	×	彫・磨輪		彫輪形 DTV形	
ヨークミンスター36	左上文様区	○	○	○	×	2	彫輪形 DTV形	彫の輪郭部 彫の輪郭部 彫輪
	右上文様区	○	○	○	彫・磨輪		彫輪形 DTV形	
ヨークミンスター38	右上文様区	○	○	○	太い磨輪	3	彫輪形	彫の輪郭部 彫の輪郭部 彫輪
	左下文様区・上段	○	○	○	太い磨輪		彫輪形 DTV形	
	右下文様区・上段	○	○	×	太い磨輪		彫輪形 DTV形	

備考) 寸法における左右の表記に関して、左下・右下文様区の下段の彫立している一対の場合は、向かって左側の彫を「右」、向かって右側の彫を「左」とする。施工技術型式は図4・5と対応。

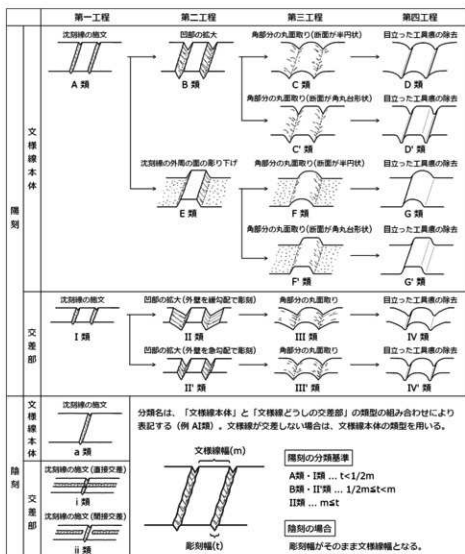


図4 彫刻工程と文様線形態の分類

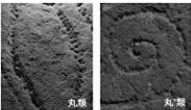
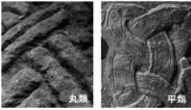
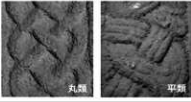
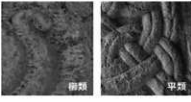
類型	仕様が想定される工具	想定できる工具の用い方	工具痕の特徴	
第一工程	丸類 丸ノミ	下書き線の進行方向に対し左右それぞれ数ミリ離れた位置から、同線に向けて斜めの角度でノミを打つ。一点を打ち終えるごとにノミ先を当てる位置をずらす。	断面がV字形を呈する幅4~11mmの沈み線がみられる。沈み線の壁面に縦方向にはしるすれがみられる。	
	丸類 丸ノミ	下書き線上に、施文面に対し垂直にノミ先を当て、真上から打つ。一点を打ち終えるごとにノミ先を当てる位置をずらす。	径2~3mmもしくは径6~8mmの円点状の深みからなる沈み線(凹部)がみられる。前後は先端が尖鋭な丸ノミ、後者は先端がやや潰れた丸ノミによる痕跡と考える。	
	平類 平ノミ 鋸割ノミ	第一工程丸類と同様の作業を行う。	断面がV字形を呈する幅4~6mmの沈み線がみられる。通常、沈み線の壁面に縦線が平行してみられるが、丁寧な作業により壁面が平滑になり、ノミを打った単位が確認できない場合もある。平ノミと鋸割ノミの識別はほぼ不可能である。	
	平類 平ノミ	下書き線上に、施文面に対し浅い角度でノミの片方の角を当て、線が進む方向に向けて連続的に打ちながら進む。	断面がV字形を呈する幅1.5~2.5mmの沈み線がみられる。彫刻幅はノミの刃の厚みに対応する。沈み線の壁面は平滑である。	
第二工程	丸類 丸ノミ	文様線本体の形跡が凹線の場合 第一工程丸類と同様の作業を行い、凹部を拡大する。	第一工程より凹部が幅広で深い。凹部壁面の様子第一工程丸類と同様である。	
		文様線本体の形跡が凸線の場合 第一工程で形成された沈み線の外側の面に対し、第一工程丸類と同じ角度でノミを打つ作業を繰り返す。	第一工程丸類と同様の痕跡が底面一面にみられる。凹部壁面の痕跡は、第一工程のまま残存する。	
	平類 平ノミ 鋸割ノミ	文様線本体の形跡が凹線の場合 第一工程丸類と同様の作業を行い、凹部を拡大する。	第一工程より凹部が幅広で深い。凹部壁面の様子は、第一工程平類と同様である。	
		文様線本体の形跡が凸線の場合 第一工程で形成された沈み線から幅広に向けてノミの刃を当て、施文面に対し浅い角度で連続的に打ちながら進む作業を繰り返す。	平行する線が底面一面にみられる。凹部壁面の痕跡は、第一工程のまま残存する。	
第三工程	丸類 丸ノミ	様々な角度で文様線の角にノミ先を当て、斜め方向で打つ作業を繰り返す。	角のない文様線がみられる。深さ1mm程度の点状の深みが、文様線上部に無数にみられる。底部の痕跡は、第二工程のまま残存する。	
	平類 平ノミ 鋸割ノミ	様々な角度で文様線の角にノミの刃を当て打つ作業を繰り返す。	角のない文様線がみられる。文様線上部は、ノミを打った単位が分からないほど滑らかである。底部の痕跡は第二工程のまま残存する。	
第四工程	鋸類 鋸刃ノミ	文様線本体の形跡が凹線/G型の場合のみが該当 第二工程平類と同様の作業を丁寧に行う。第三工程までを丸ノミで作業した場合のみが対象と思われる。	フォークで撥てたかのような、平行する複数の細く浅い線が底面一面にみられる。鋸刃の刃を踏み取るのは困難である。	
	平類 平ノミ 鋸割ノミ (ヤスリ)	第二工程平類と同様の作業を丁寧に行う。もしくはノミの刃で磨る。鋸刃ノミで自立した凹点を除去したのち平ノミ/鋸割ノミで仕上げられる場合もある。ヤスリで磨る可能性もある。	文様線および底面が滑らかな状態を呈する。平ノミ・鋸割ノミ・ヤスリの識別はほぼ不可能である。	

図5 工具の種類と用法の分類および工具痕の特徴



図6 使用想定工具の刃部形態

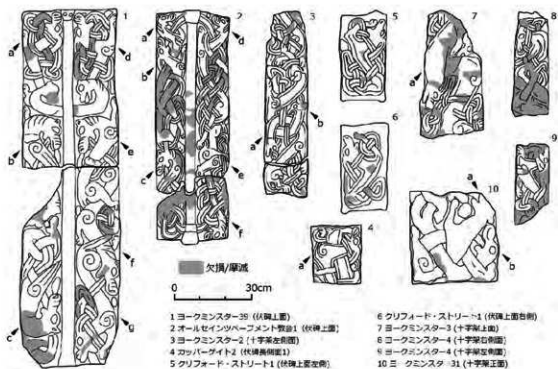


図7 ヨークII類

表2 ヨークII類の属性相関

資料名	器種	顔の位置	附環	耳	盤	渦巻	脚の脚	各部の施文技術		
								技術型式	該当部分	
ヨークミンスター39	伏牌	上面-a	○	×	×	?	○	巧	aI平 CTV平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		上面-d	○	×	×	○	○			
		上面-e	×	○	○	○	○			
		上面-f	×	○	○	○	○			
		上面-g	○	×	×	○	○			
オールセインツバプメント教会1	伏牌	上面-a	×	○	○	○	○	巧	aI平 CTV平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		上面-b	○	×	×	○	○			
		上面-d	×	○	○	○	○			
		上面-e	×	○	×	○	?			
		上面-f	×	○	○	○	○			
ヨークミンスター2	十字架	左側面-a	○	×	×	○	○	簡	aI平 DVI平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		左側面-b	○	×	×	○	○			
カッパーグイト2	伏牌	長側面1-a	○	×	×	○	○	簡	aI平 BII平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		上面左側	○	×	×	×	×			
クリフォード・ストリート1	伏牌	上面右側	○	×	×	×	×	簡	aI平 CTV平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		上面左側	○	×	×	?	○			
ヨークミンスター3	十字架	正面-a	○	×	×	?	○	簡	aI平 CTV平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
ヨークミンスター4	十字架	右側面	○	×	×	?	×	簡	aI平 CTV平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		左側面	○	?	×	○	?			
ヨークミンスター31	十字架	正面-a	×	○	×	○	?	簡	aI平 BII平	顔の縁部装飾 顔の輪郭・縁起
		正面-b	○	×	×	?	×			

備考) 顔の位置は図7と対応。施文技術型式は図4・5と対応。薄い斜線はは施文1の特徴。濃い斜線はは施文2の特徴を示す。

主要参考文献

- Hope-Taylor, B. 1971. *Under York Minster: Archaeological Discoveries 1966-1971*. The Dean and Chapter of York, York.
- Lang, J.T. 1991. *Corpus of Anglo-Saxon Stone Sculpture Vol. III Eastern Yorkshire*. Oxford University Press, Oxford.
- Phillips, D. 1985. *Excavations at York Minster Vol. II The Cathedral of Archbishop Thomas of Bayeux*. Royal Commission on the Historical Monuments of England, London.
- Townend, M. 2014. *Viking Age Yorkshire*. Blackthorn Press, Pickering.